

十三仏

嬉野の吉田地区にある十三仏は四国に彫られ、船で近くの塩田津に運ばれました。その後、昭和初期（1926～1989）に石像がこの場所に運ばれました。像の配列は「十三仏」として知られていますが、実際には5つの仏（「如来」、悟りを開いた存在の意）、7つの菩薩、1つの明王で構成されているため、名称は正確ではありません。仏陀のうち、釈迦牟尼だけが歴史上の人物と見なされています。他のすべての如来、菩薩、明王は神です。菩薩は仏陀のように悟りを開いた存在ですが、単に自分で涅槃に入るのではなく、すべての存在が悟りを開くまでこの世界に自発的にとどまっていると信じられています。明王はもともと、人々を悪から守るための守護神として仏教で採用されたヒンドゥー教の神々です。これらの「明王」の中で最もよく知られているのは不動明王（サンスクリット語でアカラ）で、彼の激しい表情、左手に悪魔を捕まえるためのなげなわ、右手に悪魔を破壊するための剣が特徴です。そして彼の後ろに大きな炎があり、怒りと情熱を燃やして心を浄化しました。

権現さん

権現さんは、十三仏の背後にある洞窟に千年以上住んでいたと言われる、水の神として知られる先住民の神の名前です。神はこの地域に成功した米の収穫をもたらすと信じられています。洞窟の入り口には崖が迫っており、そこにある自然の岩石層は、恐ろしい悪魔の表情に似ていると言われています。崖、洞窟、その前にある権現と十三仏の像は嬉野の八十八ヶ所の巡礼地のひとつであり、九州オルレ嬉野コースの人気の休憩地でもあります。